

2023(R05).06.10

関東大会1日目 茨城合同は東京朝鮮に10-41で敗れる

令和5年度・第71回関東高校ラグビーフットボール大会の1日目が6月10日(土)に東京都府中市で開催され、日立一高を含む「茨城合同」は、東京朝鮮中高級学校と対戦し、前半0-12、後半10-29、計10-41で敗れました。

(会場の東芝府中グラウンドは、4年前に話題となったドラマ「ノーサイドゲーム」の主なロケ地だった場所です。)

以下、現地で観戦したOBからの情報を一部要約して記載します。

前半開始直後、敵陣深い位置でペナルティを得ましたが、タップキックからの攻撃でミスが生じ、先制点はなりませんでした。その後も敵陣でのラインアウトミスが多く、思ったように攻められませんでした。相手のイージーミスにも救われ、2トライのみのロスコアの展開となりました。

後半7分には待望の初トライ！！ 5-12と詰め寄ります。11分にはトライを奪われ5-17となりますが、16分にはトライを奪い返し、10-17！！ 互角の戦いとなりました。残念ながら、そのあと4連続トライを奪われ最終スコアは10-41となりましたが、地力に勝る東京朝鮮に対して果敢な戦いぶりを見せました。惜しむらくはゲームマネジメント・エリアマネジメントが不足していたので、そこを改善して2日目の作新学院戦に挑んでほしいと思います。

遠いところ、保護者・OBの皆さんには多数応援に来ていただき、ありがとうございました。





※ラグビーリパブリック掲載記事※

国内

2023.06.11

【関東高校大会】歴史的キックオフ。茨城合同(日立一、太田一、磯原郷英)敗れるも、晴れ舞台楽しむ

[編集部]

【キーワード】 [高校ラグビー](#), [関東高校大会](#)



よく体を張った茨城合同の SO 梶山湊(日立一)。(撮影/福島宏治)



3校の部員たちの個性が集まり、いいチームになった。6月11日の作新学院戦には17-10のスコアで勝った。(撮影/福島宏治)

みんなで作ったチームTシャツに『IBARAKI JOINT TEAM』とあった。

なんだかカッコいい。オールスターチームのようだ。

6月10日におこなわれた関東高校大会のGブロック1回戦で、茨城合同が東京朝高に挑んだ。

同じような環境にある学校に勇気を与えた。

10-41のスコアで敗れるも、合同チームの上位大会(花園などの全国大会や、関東大会のような各地域大会)進出が認められるようになった中で、初めて踏み出した一歩だった。

茨城を代表して戦うチームとして、オール茨城(茨城)のジャージーを着て臨んだ一戦。

ピンクのジャージーの背番号10、梶山湊の蹴ったキックオフボールは22メートルライン内に入り、相手のミスもあってチャンスを迎えた。

梶山の学ぶ日立一と、太田一、磯原郷英(いそはらきょうえい)の3校メンバーで構成される同チーム。

立ち上がりの時間帯にチャンス掴めたのは、いい準備ができていたからだろう。

試合の直前練習でも、よく声が出ていた。

先制機は逃すも、ベンチから「いい入りだぞ」と声が飛ぶ。

しかし攻め切れず、8分、14分とトライを奪われて前半を0-12とリードされた。

カバーディフェンスでピンチをしのご展開。ボールを手に前に出るシーンもあったが、攻め切れなかった。

後半も入りはよかったが、中盤過ぎからトライを連続して許し、失点を重ねた。

試合後の廣瀬慎也監督(日立一)は、結果以上に、歴史的一歩を踏み出した選手たちを称えた。「大きな経験になる」と話した。

太田一のリーダーで、この日はFLでプレーした廣木翔は、相手とボールをよく追った。

背番号7は水戸の小学校でラグビーに取り組んだことがきっかけで、いま、楯円球に触れる生活に熱中している。

廣木は必死に戦った50分を、「自分たちの力がどれくらい通用するのか楽しみでした」と話した。「強いランナーを使って前に出る。前に出てタックルする。積み重ねてきたこと、自分たちの強みは出せました」

太田一でともに汗を流す1番の益子龍磨は、ビッグマン&ファストマンキャンプにも参加したことがある巨漢。

チームは、その185センチ、120キロの突破力を何度も使い、チャンスを作った。2トライを奪ったシーンは、描いていたイメージに近いものだった。

司令塔の梶山は「入りは気持ちが入っていた」と、立ち上がりに見せた、仲間たちの集中力を評価した。

しかし、終盤に失点を重ねた展開を「時間の経過とともに圧力を受け、スタミナが足りなかった」と反省した。

3校の全員が集まって練習する機会は限られている。

だからキャプテンとして、普段から練習の内容やチームの目標を、明確にして伝えることを心がけてきた。

「それぞれ、学校の空気は違います。アタックを強みとするチーム、ディフェンスの方が得意とか、いろんな持ち味がある。声をよく出す人、当たりが強い人もいて、それらを生かして戦える。そこが合同チームのおもしろさです」

同主将は、小5で日立ラグビースクールに入り、ひたちなかラグビースクールを経て高校へ進学した。

この日はキックを蹴り分け、カバーディフェンスで何度もピンチを防いだ。

「キャプテンとして、声だけでなく、行動で引っ張ろうと思い、体を張りました」と覚悟を決めて臨んだ試合だった。

磯原郷英の主将、SH安達月海は、合同チームだからこそ味わえる嬉しさを口にした。

3年生は自分だけで、2年生は2人、そこに1年生が3人加わって、計6人で日々の活動をしている。

取り組めるメニューも少ない中で毎日練習する力が湧くのも、週末には合同の仲間と会えるからだ。

「人数が多いといろんな練習ができて楽しい。最初は知らない人同士でコミュニケーションをとるのが難しかったけど、目標が決まると、すぐにみんなでそちらの方を向けました」

安達はラグビー(小)、バスケットボール(中)を経て、高校でラグビー部に入った。

4人いる兄の3人がラグビーマン。その姿に憧れ、この日、大きな舞台に立った。

兄たちも磯原郷英ラグビー部で青春時代を過ごした。合同とはいえ、同校が関東大会に出るのは27年ぶりのことだ(当時は磯原高校)。OBたちも笑顔になる。

太田一の関東大会出場は32年ぶりだった。日立一は2年ぶり。一度に3校のOBたちがシアワセになれる。合同チームの特権だ。

日立一と太田一は新入部員が加わったことで、秋の大会へ向け、単独チームでの大会出場を目指すことになりそうだ。

部員の少ない磯原郷英の安達主将は、「僕らも部員集めを頑張って、単独チームで日立や太田と戦えたらいいですね」と前向きに話す。

それが叶わなければ今回の活動で得た経験を、新しい仲間たちと組むチームで生かし、みんなを引っ張っていこうと思う。

同じようなサイクルがあちこちで生まれたら、『合同チーム』につきまとうネガティブな空気が変わるかもしれない。

廣木(太田一)は、出会いから関東大会へ向けての足取りを振り返り、「ああしよう、こうしようと、いろんなポジティブな意見が出てまとまっていった」と話した。

ジョイントするとは、ただ集まるだけでなく、新しいものを生み出すこと。だから楽しい。